The Japan Society for Analytical Chemistry

巻頭言

「分析化学」500号によせて

「分析化学」編集委員長　四ツ柳隆夫

日本分析化学会と共に歩んできた本誌がこの9月号をもって丁度500号を迎えた．歴史的な節目にあたり，本誌をここまで育ててこられた先輩並びに現会員の皆様方と共にこれをお祝いし，ここでこれまでの流れを振り返り今後の発展を期待したい．

日本分析化学会が発足して「分析化学」の第1号が発行されたのは1952年8月のことであり，初代の編集委員長は岡 宗次郎先生であった．そのころの「分析化学」は報文とノートを中心に，現在の「ぶんせき」が担当している会告，総説，講座，などから構成されていた．進歩総説が登場したのは1958年3月であった．その後「ぶんせき」と分冊したのは1975年であり，それから既に20年の年月が過ぎている．1977年に技術報告（Tページ）が登場し，英語論文のEページの掲載を始めたのは1982年のことで，それが「Analytical Sclences」として独立したのは1985年であった．同時に奨励賞受賞者の業績を中心とする総合論文が創設された．また，その時々のニーズと学問の動向をとらえて“特集論文”が企画されてきた．

1994年に分析化学総説と博士論文要録が新設され，更に1995年には技術報告は発展的に技術論文に衣がえをしてこの方向への本誌の充実が推進されている．来年度から“討論会の主題による特集論文”（仮称）も企画され，本誌の一層のup to date化が図られている．

発行部数4000部を超える規模を持つに至った今月号の500号は，丁度，本誌が世の潮流の変換点において今後の展開を企画中に出会った記念すべき通過点である．発刊以来，多くの論文等が本誌に発表され，この領域の学術と技術の進展に対し，多大な貢献をなし，かつ，そこから多くの人材を育成する基盤となってきたことは，論を待たないところである．

かって，先達の一人が国際会議から帰国して開口一番，「日本語で思いきり学問しよう」と語られたことがあった．「始めに言葉ありき」ということがある．我々は日本語で思考し，着想する．従って我々日本語を母国語とする者の研究の原点がそこにあり，母国語の学術誌を維持していく上での根源的な意義と視点がそこにある．本誌が学問と技術の新しい流れの中で，コンピュータ技術の進展に伴う言語障壁の低下と共に，全世界へ向けての日本からの特色ある高度な情報発信源として，分析化学の領域で大きな役割を果たして行くものと確信している．

会員の皆様方の優れたお仕事によるご協力を期待する．

NII-Electronic Library Service